

## 花婿を迎える十人の乙女

大村 恵美子

いよいよ、定期演奏会でカンタータ 140 番を演奏する時が訪れました。これまでに 1970 年、1976 年と定期演奏会でもとりあげ、さまざまな機会に合唱部分を演奏しながら、1979 年に私が指揮をするようになってからは、1 回も上演する機会がなかったのです。というのも、この作品がカンタータとしてはバッハの最後の時期（といっても 1731 年、46 歳）のものであり、年代順に追ってくと最後のほうになってしまったからです。ライブツィヒのトーマス教会カントルの職務に精魂つき、情熱を失ってしまったバッハは、既成の他の作曲家のものや、それまでにたくわえてきた自分の膨大なカンタータの中から再演することで、その職務を果たすようになったのです。

### 存在することの稀な三位一体節後第 27 日曜日

さて、三位一体節後第 27 日曜日にあたる 1731 年 11 月 25 日にこのカンタータは初演されたわけですが、教会暦というのは、12 月 25 日のクリスマス前 4 週間の、待降節（アドヴェント）から始まります。そしていちばん最後にくるのが、三位一体節後第 27 日曜日、これは年によって、あったりなかったりし、バッハの全生涯では 1704 年、1731 年、1742 年と 3 回しかなかったそうです。というのも、春の復活節（イースター）が固定したものではなくて、春分後の満月の日から初めての日曜日、という設定ですから、3 月から 4 月にかけて移動することになり、3 月 26 日以前に繰り上がった年だけ、順送りに日曜がふえて、ふつうの年はアドヴェントの前は三位一体節後第 25 日曜日までというのが多いのに、第 27 日曜日まで、入ることになるのです。

### 聖書の譬え話

そういう珍しい日曜日なのですが、このぎりぎりの末端におかれた日曜日のための福音書は、マタイ 25:1-13 の、「十人の乙女」の譬えで、天国の到来を迎える心構えをさすものです。

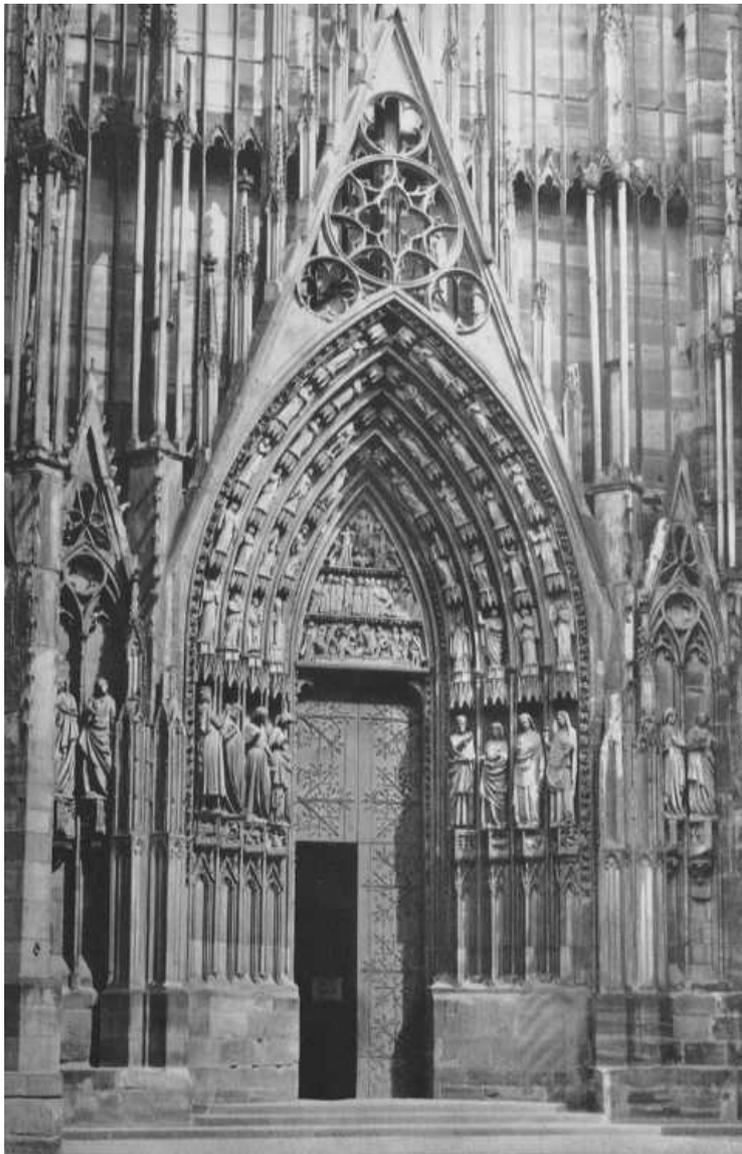
十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。

真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声があった。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』

愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。しかし主人は、『はっきりしておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。』

### 愚かな人間の面白さ

私が昔留学していたストラズブルには、中世ゴシック建築の典型として名高いカテドラルがあって、その入口正面に、これまた名高い「十人の乙女」の彫像がありました。聖書では、愚かなほうは眠りこけ、賢いほうはしゃんと起きて待機している。ところがここの彫像は、柱に沿った空間に合わせるため、全員立ち姿でなければならず、そして向かって右側の賢い乙女たちの慎ましさよりも、左側の愚かなほうは、ずっと生き生きとしてそれぞれに個性的です。眠りこけるどころか、隣りのりんごのようなものを持って誘いかける男に、媚態さえ見せたり、油の壺



を一応さげてはいるけれども、何か別のことに気を

とられて、あらぬ行動をとりかねない気配の乙女もいる。こんなところに、中世の人間の、自由な想像力が感じられます。

このような多様な聖書受容の豊かさの上に立って、バッハは端然とした魂の花嫁像を、音にあらわしました。魂（ソプラノ）とイエス（バス）の2曲の二重唱で、前の曲では花嫁の出会いに先立つ期待と不安を、後の曲では両者の一体となった至福を真正面に受けとめて、歌い出しています。

現在の人間だったら、5人ずつの、賢いグループと愚かなグループ、という譬え話からどんなことを想像しやすいでしょうか。勝ち組、負け組一、受かるものとふるい落とされるもの一、だから油断なく緊張してその時、つまり自分を売り込めるチャンスをのがすな一、というようなことになるのか。

#### ひたすら精進で救われる？

私は、この元日に福井の永平寺に行ったのを機会

に、とりあえず最新刊の平易な道元の解説書を買って読んでみました（松原泰道『道元』アートデイズ）。仏教の研究書もお経も、漢文の素養のない私にはとりつきにくく、かつて精神分析・フロイト・ユングその他の本をまとめて読んだ頃に、鈴木大拙にも出会いましたが、いつも他人の解説で耳学問のような形の理解でしかないのは残念です。何とかもう少し接近してみたい思いは持ちつづけているのですが。

そういう私ではありますが、とりあえずこの『道元』を読んで、考えてみました。宗教では、神からの恩恵に浴して、それを素直に受けとって感謝して生きればよい、という状態になるには、まず自己の怠惰をあらため、罪悪を悔い、道を直くしてひたすら待ち構えなければならない、ということがあるようです。救われるものと救われないものが予定さされている、後から泣き泣き追っかけてきても、もう天国の扉は固く閉ざされてしまう。

『道元』の中でも、しきりと、平常修行にはげみ、掃除にはげみ、食事にも感謝をもって心をこめてつくり食し、困難を困難ともせず、ひたすら精進することが奨められています。

そうすると、そのような働き好きで、活発な、エネルギーのあるタイプの人間が、人生の勝ち組なのか。何もしないような、トロいような人間はダメなのか。私には、そこがどうもつかめないのです。イエスが大好きだった、子供は、どうなのか。世界の中に、ポッカーと、無防備に、無作為な状態で生きているではありませんか。

#### 競争が人生ではない

仏教でも、「ぼんのう」を戒めています。ルターも、「人が義とされるのは、その行いではなく、ただ信仰による」と言います。信仰？ ただ「ナムアマダブツ」と念仏を唱えるだけで救われる？

私はこう思います。私がかつて有意義に勉強をとらげんで体をこわして入院したとき、解放感にみだされ、ただ天井をみあげて寝ているだけで、大変な幸福感を味わったことがあります。そのせいか、今でも、肉体の死はすなわち解放、という実感が強いのです。そのような、無為のしあわせ、あるがままの恩寵、これはマイナス要素ではないと思います。もし、人生に病があり、苦痛があり、災害があるなら、それも受け入れよう。すべては創造主の胸中にあり。

そこまでが万人共通。だから、障害があっても、何も社会に貢献できずに、他人の世話にばかりなっているような人にも、神から造られたという資格は、同じようにあるのです。日頃せつせと働く人でも、

寄り道をしたり、ほうけたようにブラブラ過ごすことがあってもいいのです。若いものがグレても、泣き叫んでも、何でもありが人生なのです。

ただし、キリスト教ならイエスの愛にめざめ、仏教なら仏の道をさとり、いずれにしても、何でもありのこの世が、大きな慈愛によって支えられ、保たれ、生かされていることを知って、それに自分からも応えようとするとき、それまでの自生的な態度は、求心的な方向づけを持ってくるでしょう。そして、花婿イエスにつき従って、天国のうたげの席へと、秩序だてられた歩みに伍してゆくことになるでしょう。愚かな乙女、賢い乙女、これは他ならぬ私自身の、二様の姿なのではないでしょうか。

そして願わくは、賢い乙女が、愚かな乙女よりも魅力において色あせてしまうことなく、バッハの140番のカンタータのように、豊かに、ひろく、まろやかに、喜びに溢れたものとなりますように。—こんな思いが、私の心のなかに渦巻いたのです。

前頁図：ストラズブールのカテドラル西側正面の南正門  
右：同部分「この世の王子と愚かな乙女たち」(1270-1300)



## 21 世紀の年賀状 (つづき)

新しい歌を主にむかってうたえ。(詩篇 96-1)  
主にあって敬愛する大村様

昨年は「月報」にダーフィット・フルッサーの『ユダヤ人イエス』(拙訳)の、実に適切な書評をお書き下さり、心より感謝いたします。

また昨年は、ヘンキース教授を囲んで、ボンヘッファーの獄中詩を共に学ぶことができたことも、よき思い出であります。「月報」にもお書きになった“Von guten Mächten”はあれ以来ずっと考えつづけておりますが、内藤道雄氏のように「善き御力持者らに」と訳すと人格化され神話化されすぎ、「讚美歌 21」のように「善き力」とすると「主の善き力に」(村椿訳『ボンヘッファー 1 日 1 章』)というように限定されてしまうので、可能なら原語の複数形を活かして「善き諸力(ちから)に」(ルビを入れる)としたいですね。

今年も善い歌をうたって下さい。シャローム！

信頼の年としての 21 世紀

20 世紀はすでに多くの人が言っているように、「戦争の世紀」であった。憎しみと争いが世界規模で絶えなかった。小さな紛争は今日も続いている。特に争いが激しく争点になるのは、民族と宗教間である。

そこで当然 21 世紀は戦争のない世紀を皆が望む。しかしこれは容易ではない。民族を持ち出すまでもなく、人間が信頼し合うことは個人のレベルでも困難である。

そこでわたしたち日本人は、良い意味での個人主義に立つことを学ばねばならないと思う。それは何も、自分勝手ということではなく、他の人間、民族に対する良い意味での「間・距離」を保つことである。積極的な意味での、私はわたし、他人は他人。他の人を自分の勢力下に置こうとしないことであると云ってもよい。

日本人は、誰かの「近く」にいないと、ある仲間の中にいないと落ち着かないところがある。それは、駅で、容赦なく他人に近づき、体が触れることを何

とも思わないことと似ていると言えよう。

南 吉衛

## 新春早々の日韓オペラの夕べ

大村 恵美子

年が明けてすぐ、渡邊明様よりお電話をいただき、東京室内歌劇場のオペラに、東京バッハ合唱団の皆さんを招待してくださるとのことでした。合唱団の初練習が1月13日（土）と15日（月）、この2日に出席した団員で、都合のつく20数名が、1月20日（土）の練習を早々にきりあげて、初雪の中を、初台の新国立劇場へと向かったのです。

2001年1月20日（土）18:00、新国立劇場  
＜日韓オペラ共同制作記念＞  
韓国国立オペラ団・東京室内歌劇場共催公演  
『虎月伝』『春・春・春』

金大中大統領の英断でにわかに現実のものとなった日韓文化の交流に、こんなすばらしい形で私たちも新年早々から恩恵を受けることができたのは、ほんとうに21世紀の幕開けにふさわしい幸福だと、心より感謝します。

企画もすばらしく、日本の『虎月伝』は中国の怪奇譚を題材としたもの（中島敦原作）、韓国の『春・春・春』の作曲は日本の狂言からヒントを得たという。中・韓・日の同根で、しかもそれぞれ独自性をもって発展した歴史が、くしくも象徴されているようなプログラムでした。

『虎月伝』は、20年も昔に見て感動を受けたものでしたが、今回の主役・渡邊明さんは、昔とちがって大きな舞台となったその空間を圧して、朗々と、気品高く、しかも円熟したしなやかさをもって、能樂的世界をつくり出しました。

内容については、詩・芸術の鬼になった一途に純粋な人間が、ここでも描かれますが、能の根源でもある、死してもなお執念で世に現れるような、いわば福沢諭吉の「惑溺」、仏教なら「煩惱」でしょうか、そのとらわれの姿には、人を涙させるものがあるのですが、なにか人間的にひろがりの断たれた孤高で悲劇的なさまは、やはりバッハのような宇宙的芸術に比べると、息苦しい気がします。反面教師的人生訓のようにもとれるのです。

それに対し、韓国の『春・春・春』は、オペラ・ブッフアの陽気な世界で、女か金かと、がんこな親爺

にせまる男のおもしろさが、男かコーヒーかと、これまたがんこな父親にせまる娘の、バッハの「コーヒー・カンタータ」によく似ていて、自由を求めて旧い社会の絆をふりほどこうとする、新興勢力の機知的逆襲、そして人間的に解放される最後の大団円、と、心温められて終る楽しい物語です。高水準のアーティストたちの、一挙手一投足が、韓国への親しみをぐんぐんと深めてゆくようで、今や私の心はかれらの国への好奇心で一杯となりました。

2002年のサッカー・ワールドカップ共同開催という名案は、誰が考えついたものか、ぜひ、はげしい競争心でしのぎを削り合うことなく、今夕のように、同じ運命共同体としての大きな寛い心で結ばれた、美しい画期的なイベントとなれますよう、祈るとともに、大丈夫、という信頼が一気に高められてきました。ほんとうに意義あるたのしい一タへのお招き、ありがとうございました。

3月22日-25日には、またソウルで同じプログラムのものが演じられるとのこと、東京での好評が伝わって、東京に倍する大成功を勝ち得ていただきたいものと、期待しています。

### バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.9

第2期の刊行が始まっています

第2期10曲のうち、今年の演奏曲目を含む5曲分が先行して出版されました。東京バッハ合唱団では、年始より、この新しい楽譜をつかっている練習が開始されています。

この欄でもご案内しましたように（No.7）、次回定演（第89回、タイトル“祝典のバッハ”、5月12日）では、BWV9、BWV51、BWV29、BWV140の4曲が演奏されますが、後半2曲がこの「50曲選」シリーズ第2期に含まれます。本年末に取り上げるクリスマスのカンタータ BWV36を加えた、第2期の内容は以下の通りです。

- <み神に 謝しまつらん>BWV29 (32頁、1500円)
- <喜びのぼれいと高き星に>BWV36 (56頁、1900円)
- <与えよパンを 飢えたる者に>BWV39 (40頁、1700円)
- <イエスをほめよ 新たな年に>BWV41 (36頁、1600円)
- <目覚めよと呼ばわる ものみの声高し>BWV140 (52頁、1900円)

今春には、他の5曲（BWV42、45、61、63、68）も含めて、一般への発売を開始する予定になっていますが、月報読者のみなさまには一足お先にお分けいたします。事務局までお問合せください。